『六書總要』（明・呉元満著）の音注について

富　平　美　波

1　は　じ　め　に

呉元満は、明の万暦年間に、今回とりあげた『六書總要』をふくむ数種の文字学・音韻学関係の著述を発表している人だが、彼の伝記資料としては、『書史會要』巻十（明・朱謀堙続修分）・『佩文斎書畫譜』巻四十四（書家傳三十三）・『四庫全書總目提要』巻四十三（小学類存目、「六書正義十二巻」の条）などに簡単な伝があるほか、明の万暦以来、康熙・乾隆・道光・民国と改修された歙県志、ならびに道光修の徽州府志に伝があり、なかんずく万暦『歙志』（張涛修、謝陛纂。傳巻五、志十五、文苑）の伝は、筆者の評語も付されていてより詳しい。籍貫は上記徽州の歙県、片目が不自由で官職にも就かず、生涯小学に凝った人のようである。趙宧光および朱謀㙔と学問上の交際があり、そのことは、趙宧光の『説文長箋』の中の呉元満の業績についての言及や、呉元満の『六書正義』に付された朱謀㙔の序文からも証明される。

現代の書目のなかで、呉元満の著作を多く掲載しているのは、安徽省図書館編の『安徽文献書目』（一九六一年七月、安徽人民出版社）で、安徽省博物館所蔵として、

呉敬甫六書總要六巻　明刊本　四冊

六書正義一二巻　明刊本　八冊

諧聲指南不分巻　明刊本　一冊

六書泝源直音三巻　明刊本　三冊

を掲げている。『四庫提要』が著録するものも、巻数に異同は存するが、これと同じである。そのほか、『千頃堂書目』に「萬籟中聲二十巻」が著録されており、台湾の『國立中央圖書館善本書目　増訂本』（一九六七年刊）に同名の書籍を載せている。：

萬籟中聲一巻切韻樞紐一巻四聲韻母一巻韻學釋疑一巻一冊　明萬暦間原刊本

我国で見られるものとしては、管見のところ、「六書總要」五巻に、「坿小篆之訛」一巻と「諧聲指南」一巻を付した明刊本が、東京大学東洋文化研究所に、「六書正義」十二巻の明刊本が、尊経閣文庫に、それぞれ所蔵されている。上記我国所蔵の『六書總要』には万暦十二年の「自序」、付載の「諧聲指南」には万暦十一年の「引」言、『六書正義』に

は万暦三十三年の「自叙」が付けられている。また、後述永島榮一郎氏のご覧になった『萬籟中聲』には万暦十年の序がついているとのことである。

このほか、民国修『歙縣志』の伝が掲げている「六書泝原」は、『六書總要』の自序に言われている、『六書總要』の元になった「六書泝源十六巻」を指すものかとおもわれる。上記自序に、当時版刻の能力をこえていたとあるから、結局刊本の形では発表されなかったのかもしれない。また、明・方以智の『通雅』に書名の見える「六書分類」の存佚も不明である。

なお、発表者は現在までのところ、以上のうち、国内所蔵のものしか目にしていない。

2　呉元満の諧声論

呉元満の諧声論は、『六書總要』巻首に付された「諧聲論」および『諧聲指南』巻首の「諧聲指南引」において述べられ(注1)、また『四庫提要』の「諧聲指南」の条（巻四十三、経部、小学類存目一）に紹介されているところでは、諧声文字の性格を、

諧本声・諧叶声・諧本音・諧叶音・諧転声・転叶声・諧転音・転叶音

の八種に分類することに眼目がある。(趙宧光の『説文長箋』巻首に引用されている呉元満の諧声論はこれと若干内容が異なり、諧声の種別を六種挙げている。同様に、『六書正義』のものも異なる可能性がある。)

これは、上記「諧聲指南引」で呉元満自身が述べるところによれば、鄭樵の『諧聲制字六圖』・楊桓の『六書統』・趙古則の『六書本義』「諧聲論」等、宋元明以来、同様に「声」・「音」等の語を用いて、諧声を分類あるいは組織化して考える研究を引き継ぐもので、また、呉元満は、この着想にもとづいて、諧声文字を声符ごとに系列化して配列した単字表形式の作「諧聲指南」を作成したことにより、趙宧光の『諧聲表』（あるいは「諧聲通韻表」。存佚不明。）の制作を促進した(注2)。

上記のような種別は、声符と諧声文字との音の調和のしかたによって、段階づけられたものと思われる。それが負う時代的・人的な制約によって、その成果がどのような水準にとどまっていようとも、筆者は、このようなものも、学史上の連関をもつ一事象として、一応の調査・紹介に値するものと考えている。そして、そのためには、まず『諧聲指南』の「凡例」の記述などから、考えられる最も単純な予想を立てておき、見出し等で八種の種別を表示する『六書總要』や『諧聲指南』収載の個々の諧声文字のケースがそれで解釈可能かどうかを検証しながら、だんだんにその特徴を明らかにして行くのがよいと思われ

る。

『六書總要』は、その「自序」によれば、八千七百二十字を収録した『六書泝源』十六巻が浩瀚にすぎて版刻できないので、うち、諧声字六千八百五十字を削除して、別に『諧聲指南』一巻を編み、象形・指事・会意および自身声符となる諧声字・闕疑扱いの文字計千八百三十字（実際には一八三七字）を残して『六書總要』としたものである(注3)。したがって、上記のような検証のためには、『諧聲指南』によるのが最良だが、同書は、収録字に注釈の施されていない単字表形式の作であり、その点、収録字数は少ないながら、『六書總要』は、各々の文字に音注が（もちろん義注も）付いている点が、最初のてがかりとしては、便利である。

3　『六書總要』の音注について(1)

しかし、『六書總要』は、一八三七個の文字に対して、形・音・義についての注釈を施す文字学書であって韻書ではないし(注4)、字音を基準とする配列法をとってもいない。編集にあたっては、五四〇の部首を「数位」・「天文」・「地理」・「人倫」・「身体」・「飲食」・「衣服」・「宮室」・「器用」・「鳥獣」・「虫魚」・「艸木」の一二の事類に分け、各々の部首の下に、象形・指事・会意・諧声・闕疑の順に小見出しを付け(注5)、それぞれに該当する文字を配列する形式を取っている。

したがって、2で述べた作業のためには、各々の見出し字（親字）に付された音注がどのような音系に基づいており、『六書總要』ひいては『諧聲指南』において、どれどれの文字が同音であり、また同声母、同韻であるとみなされているかを判定しなければならない。これが、本稿の主題である。

呉元満の音系を考証する資料としては、現存する韻書の『萬籟中聲』やこれに付載されている韻表の『切韻樞紐』があるのだから、『六書總要』の音注をこれと比較してみればもっともよいわけだが、筆者はまだこの書を見ていないので、以下のような迂遠な手続きをとることになった。

呉元満の音系については、かつて永島榮一郎氏が、「近世支那語特に北方語系統に於ける音韻史研究資料について（續）」(注6)のなかで、『萬籟中聲』と『切韻樞紐』(注7)とから研究された結果を発表しておられる。同論文から図表の部分をお借りして引用すればつぎのようであって（印刷の便宜上、図の方向等が逆になっている部分がある）、『萬籟中聲』の三十一字母、ならびに平（・上・去）声の三十一韻、入声の十五韻について、その音価

を推定し、韻類については、『切韻樞紐』における排列と、平（・上・去）声韻と入声韻との関係を示している。なお、注は原著者のものである。

見群（上去入）	[k]
溪群（平）	[k']
疑	[ŋ]
端定（上去入）	[t]
透定（平）	[t']
泥	[n]
幫並（上去入）	[p]
滂並（平）	[p']
明	[m]
精從（上去入）	[ts]
清從（平）	[ts']
心邪	[s]
照牀（上去入）	[tʂ]
穿牀（平）	[tʂ']
審禪	[ʂ]
曉匣	[x]
影喩	[o]
非奉	[f]
微	[v]
來	[l]
日	[ʐ]

上平聲	第一東	第二容	第三陽	第四岡	第五光	第六先	第七元	第八眞
	第九淳	第十庚	十一萌	十二文	十三桓	十四寒	十五咸	
下平聲	十六矦	十七尤	十八宵	十九豪	二十遮	廿一齊	廿二之	廿三灰
	廿四瓜	廿五麻	廿六孤	廿七魚	廿八歌	廿九乖	三十咍	卅一皆

（第一圖）	東［uŋ］	矦［ou］	孤［u］	篤［u］
（第二圖）	容［yŋ］	尤［iou］	魚［y］	浴［y］
（第三圖）	陽［iɑŋ］	宵［iɑu］		藥［iɑu］
（第四圖）	岡［ɑŋ］	豪［ɑu］	歌［o］	各［o］
（第五圖）	光［uɑŋ］			郭［uɑ］
（第六圖）	先［iεn］	遮［iε］		屑［iε］
（第七圖）	元［yεn］	遮（註一）		月［yε］
（第八圖）	眞［iəŋ］	齊［i］		質［i］
（第九圖）	淳［yəŋ］			述［yə］
（第十圖）	庚［əŋ］	之［l̩•ɿ］		革［ə］
（第十一圖）	萌［uəŋ］			末［uə］
（第十二圖）	文［uən］	灰［uei］		勿［ue］
（第十三圖）	桓［uɑn］	瓜［ua］	乖［uai］	豁［ua］
（第十四圖）	寒［ian］	麻［a］	咍［ai］	曷［a］
（第十五圖）	咸［ian］	加（註二）	皆［iai］	狎［ia］
	（第一段）	（第二段）	（第三段）	（入聲）（註三）

（註一）　鞾曰の二字が見られる。

（註二）　加には見系曉系の聲母を持つものが麻にもあるが、茲にも再出してゐる。［i］が加はり［ia］となるものである。

（註三）　入聲に關する注音は大體を示したに過ぎず、尚再考を要するものがある。

なお、同論文の作成にあたって、永島氏が『六書總要』をも参照していられるのは、文章中から明らかであるので、本稿は既述のことをおぼろげになぞるにすぎないとも言えよう。

具体的な個々の文字がどの字母・どの韻に帰属するかがわかる資料として、今回筆者が使用できたものに、『諸聲指南』の「目録」がある。ここでは、声符を韻・字母ごとに分類配列しており（本文も同様である。）、韻目と字母とが見出しで表示されている(注8)。これから、該当する声符がないので欠けている少数の韻を除いて、平・上・去・入すべての

韻目と字母の名前とがわかるが、それらはさきの資料２のもの（韻は平入のみ）と一致している。

『六書總要』の音注も、基本的にこの音の枠組みに則っていると考えてさしつかえないと思われる。その理由の一つとして、『六書總要』が使用している反切の用字をあげることもできる。『六書總要』は、見出し字に反切か直音かどちらかの音注を付けているが(注9)、反切には、反切上字として、字母字を用い、反切下字として韻目字を用いるという、いわば目で見て音類がわかることを主眼としたと思われる特徴がある。『六書總要』の反切用字を、『諧聲指南』「目録」の字母・韻目ごとにまとめてみると、次のようになる。（字母・韻の名称は、『六書總要』からはわからないので、『諧聲指南』のものである。）

字母	幇	滂	並	明	非	奉	微	端	透	定	泥	来	精	清	従	心
反切上字	幇	滂	並平	明漠	非風	奉	敝	端	透	定甸	泥奴	来郎	精	清	従牆	心
	邪	照	穿	牀	審	禅	日	見	渓	群	疑	暁	匣	影	喩
	邪	照	穿	牀澄	審申	禅	日	見	渓	群	疑*衄	暁	匣	影因*日	喩

平 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31

韻目　東容陽岡光先元真淳庚萌文桓寒咸侯尤宵豪遮斉之灰瓜麻孤魚歌乖咍皆

反切下字

東容陽岡光先元真淳庚萌文桓寒咸侯尤宵豪遮斉之灰瓜麻孤魚歌淮咍皆

公弓*姜剛王堅宣*升君*登弘*分　干間鉤周　　司圭娃　虞戈　孩*涯

當　均*　端*　　居禾

上 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31

董甬養講廣銑阮軫楯梗？吻？罕喊昕有小好者薺止賄寡馬古語果夬海解

董甬養講廣銑阮軫準梗　吻緩罕　吼有小好者薺止賄寡馬古語果夬海解

拱*　罔　選*　　沼杲也几*史　馬假　主火毒　蟹

雅*

去 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31

棟用漾杠°誑線願震順艮孟問換翰陷候宥笑號蔗祭志惠卦禡固御箇怪害戒

棟用漾杠°誑線願震順艮迸問換翰陷候宥笑號蔗祭志惠卦禡固御箇怪害戒

凍　絳蕩*況　選*正俊巽　段*貫淡澗豆究　　季至貴　駕*誤句　　蓋隘

敬

入 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

篤浴薬各郭屑月質術革末勿豁曷狎

篤浴薬各郭屑月質術革末勿闊*曷狎

谷*　作　結　吉　克獲骨*滑*葛

反切上字においては、二個の例外（頭に＊のついたもの）を除いて、字母以外の文字が使われているのは、字母となっている文字あるいはそれと同音と考えられる文字に対する反切においてのみであり、反切下字においては、まず韻目となっている文字とその同音字が使われており、他の文字が使われている場合は、やはり例外（＊）はあるが、おおむね韻目字かそれと同音の文字に対する反切においてである。したがって、『六書總要』の反切は、『諧聲指南』に見られるような字母と韻の区別に基づいて作られていると考えておおむね支障はなかろうと思う。

そこで、『六書總要』の見出し字のうち、上記の韻目となっている文字、および上下字に字母・韻目字を用いた反切注の施された文字を核として、相手を音注として持つ、あるいはお互いに音注になりあっているという関係によって、同音字のグループを形成してゆき、それぞれが何韻の何字母に帰属するかを判定してゆくことにする。たとえば、次のような場合である。

昔：心質切

息：音昔　　同音：　入声質韻心母

悉：音昔

鰋：音悉

析：音悉

東：端公切

‖

冬：音東　　同韻：平東韻

工：見東切

‖

公：音工

その際、孤立した音注や、一種の「互用」の関係になって、他の音注との関係が見いだせないグループが出現するので、同韻ないし相配の韻に、同音類の文字が帰属しているかどうかや、『諧聲指南』「目録」において、どこに位置づけられているか等によって、それぞれの帰属をさだめる。左に去声十九號韻を例に上げる。

幇母	報：音豹	端母	到：端號切
並母	暴・虣：音抱	定母	道：定號切
明母	皃：明號切		盜：音道
	冒・冒：音皃	泥母	鬧：泥號切

清母	造：清號切	見母	告：見號切
従母	皁：従號切	疑母	㬰：疑號切
心母	臮：心號切	影母	奥：影號切
照母	翟：音罩	匣母	夼・顥：音浩

幇母・並母の「音豹」・「音抱」は孤立した音注であるが、同じ中古号韻幇組の冐・冒字がこの韻であり、相配の呆（保同）：幇好切・乍：音保が、上声十九好韻に入っていて、中古豪韻系幇組字は十八宵韻をはじめとする他の韻には所属していないことから、このように定める。「音抱」を並母としたことについては、『諧聲指南』の「目録」で、暴字が並母に列せられていることも参考にしている。翟字（音罩）も孤立しているが、中古二等肴韻系の莊組は、この十九豪・好・號韻に入っていて（巢：牀豪切、爪：照好切、叉：音爪）、宵韻等には入っていないことからここに入れる。「音浩」と注された二字に関しては、本書で中古全濁声母の文字は多く去声と認められることから、この韻所属と判断する。

但し、このようなグループ分けは、見出し字の字音と音注の字音とが、同じ基準に基づいていなければできない。下記のような理由からも、体系として全く異なることはあるまいと思われるけれども、個別の字音に関しては、機械的でない手続きが必要な場合もある。たとえば、「用」は、『六書總要』においては、「鐘」の本字と認められており、第一の音注は「音終」（平東・照）であって、反切下字や『諧聲指南』の韻目としての「用」は、『六書總要』の「転喩仲切」（転注義　もちいる　の場合）に対応するものと考えられる。このほか、冉：音然（平先・日）／染：音冉（上銑・日）の「冉」字の場合など、音注としてはより一般的な音義や派生字が用いられる傾向がある。

右のようにして、グループ分けした結果、個々の文字の音類は、『諧聲指南』「目録」掲載字と一致する文字については、おおむねそれと同じ類に落ち着く。異同のあるものについても、個別の字音の判定に関わるものと思われる。それらには、『六書總要』の同字に対する第二・第三の音注（「方音」注や「転」音注）(注10)と一致するもの、中古同じ韻類のものの帰属が『六書總要』においても動揺しているもの、声母の認定が中古音と一致しているものなどが多く、著者の考え方の移動や、書物からの知識などが影響した結果ではないかと思われるからである。

例　『總要』兄：音薫（平淳・暁）「方音凶」／『指南』兄・凶：平容・暁

支：音之（平之・照）　／　支：平斉・照

恵：暁貴切（去恵・暁）　／　恵：去恵・匣

ただし、『諧聲指南』本文全体の調査を欠いている現在において確定的なことは言えない。

4　『六書總要』の音注について(2)

作業の結果、呉元満の平・上・去・入計一〇八韻に所属する『六書總要』の見出し字は、中古音に照らしていうと、次のようであることがわかる。（上・去声の韻目は相配の平声で代表させる。）ただし『六書總要』にたまたまその組の声母をもつ字が欠けている場合、推定により表示することはしていない。また、個別の特殊音注例については省略したものがある。

一東	東一等　冬	幇組　端系　見組　影母
	東三等　鍾	非組　明母　来母　知・章組　見組（巩）
二容	東三等　鍾	来母　精組　知・章・日組　見系
三陽	陽（開）	来母　精組　知・章組　見系
	江	暁組
四岡	唐（開）	幇組　端系　見組
	江	幇組　見・暁組
	陽（開）	非組
五光	唐（合）陽（合）	見系
	江	知組　莊組
	陽（開）	莊組
六先	元・先・仙（開）	幇組　端系　知系　見系　＊合口（孑）
	厳・添・塩	
	凡	渓母（欠）
七元	元・先・仙（合）	端系　知・章・日組　見系
	仙（開）・塩	邪母（次・𢧵）
八真	真（開）臻欣	幇組　端系　知系　見系
	侵	
	蒸（開）	
	庚三等・青・清（開）	

	耕（開）	匣母（幸）
	諄	心母（睿）
九淳	真（合）諄	来母　精組　知・章・日組　以母
	文	見・暁・影組
	庚三等・青・清（合）	見・暁・影組
一〇庚	庚二等・耕（開）	知・荘組　見・暁組　明母（黽）
	登（開）	端組　泥母　精組　見組
	痕	端組　見系
	魂	幇組　端組　精組
一一萌	庚二等耕登	幇組
	庚二等耕登（合）	見・暁組
一二文	文	非組
	桓	幇組　端組　来母　精組
	魂	見・暁組　影母　泥母（嫛）
	庚二等・耕（開）	娘母（嚴）
一三桓	桓	見・暁組
	山・刪（合）	娘母　荘組　見・暁組
	仙（合）	荘組
	元（合）	暁母（夐）
一四寒	寒	端系　見系
	覃談	
	山・刪（開）	幇組　娘母　荘組
	咸銜	知・荘組　疑母（嵒）
	桓	明母（曼）　匣母（丸・完）
	元	非組
	凡	
	塩	影母（弇）「旧訛音干」とあり。
一五咸	山・刪（開）	見・暁組
	咸銜	

一六侯	侯	幇組（牡・戊・敄・楸）
		端系　見・曉組
	尤幽	非組（否・缶・不）
		明母　幇母（彪・驫）
一七尤	尤幽	端系　知・章・日組　見系
	侯	端母（斗）
一八宵	宵蕭	幇組　端系　知系　見系
	肴	幇母（麃）　見・曉組
一九豪	豪	幇組　端系　見・曉組
	肴	幇組　知・莊組　疑母（齩）
二〇遮	麻三等（開）	明母　精組　章組　以母
二一齊	支・脂・微（開）之	幇組　端組　泥組　精組　知組　章・日組
	齊・祭・廢（開）	見系　＊合口（璽・遺・季）
二二之	支・脂（開）之	精組　莊組　章組　日組
二三灰	支脂　灰	幇組
	微　廢	非組
	支・脂・微（合）	端系　知系　見系
	灰・泰・齊・廢（合）	
二四瓜	麻二等（合）	見系
	佳（合）	（娃・卦）
二五麻	麻二等（開）	幇組　知・莊組　見・曉組
二六孤	模	幇組　端系　見系
	虞	非組
	魚虞	莊組
	侯	明母（某）
	尤	非組（阜・富・負）
二七魚	魚虞	精組　来母　知・章組　見系
二八歌	歌戈	幇組　端組　精組　来母　見・曉組
二九乖	皆・佳・夬（合）	見系
	咍	影母（毒）

	泰（合）	匣母（會）
	灰	溪母（凵）「方音愧」
三〇咍	咍泰（開）	幇組　端・泥組　精組　見組
	皆・佳・夬（開）	幇組　知・莊組
		見組（介・夬）
	灰	来母（耒）
三一皆	皆・佳（開）	見組　影母
一篤	屋一等沃	幇組　端系　見系
	屋三等燭	明母　非組　知・章組
二浴	屋三等燭	精組　来母　知・章組　見系　日・莊組（？）
三藥	藥（開）	精組　知・章・日組　見・影組
	藥（合）	見母（矍）
	覚	見・曉組
四各	鐸（開）	幇組　精組　見系
	覚	幇組　見組
五郭	鐸（合）	見・曉組
	藥（合）	影母（蒦）
	覚	知・莊組
	沃	影母（沃）
六屑	月・屑・薛（開）	幇組　端組　来母　精組　知・章組　見系
	怙葉業	
七月	月・屑・薛（合）	端系・見系
八質	質（開）迄	幇組　端系　見系
	緝	知・章組
	職（開）	莊組（叟・品）
	陌三等・錫・昔(開)	
九術	術	精組　来母　章組　影組
	物	見組
	錫・昔・職（合）	曉組　影組

	櫛緝	莊組（瑟・翌）　日母（入）
一〇革	陌二等・麦（開）	幇組　知・莊組　見系
	職（開）	莊組
	末	端組　来母
一一末	末	幇組（犮・末）
	徳（合）	見・暁組
	陌二等・麦（合）	
一二勿	末	幇組（癹・癶）
	没	幇組　端組　泥母　見・暁組
	物	非組　影母（欝）
	徳（開）	端組　来母　精組
一三豁	末	見系
	黠・鎩（合）	莊組　暁組
一四曷	曷	端組　来母　精組　見系
	合盍	
	月	非組
	乏	
	黠・鎩（開）	幇組　莊組　見系
	狎洽	莊組
一五押	狎洽	見組

表の中で傍線（波線）をひいてある部分は、中古同類の音類が、呉の二韻にわたって所属しているところである。主要な部分の内訳を掲げれば、次のようである。

1．中古止摂幇組

【斉】匕＊畐彼轡秘畀＊丕䜌痞皮毗罷鼻比

【灰】＊卑悲備贔眉美靡魃

2．中古止摂の精組・知系

【斉】斯（「転音司」）糸璽徙枲知巵旨只夂豸黹咫觶致（「方音志」）寔智識蚩恥侈熾雉治

【之】茲畐鼒子此次束賜字巳兕（「方音洒」）司絲厶思死四絲舜辭嗣飤伺屮＊支枝止＊至志差歯尸師（「旧審斉切」）史＊矢（「旧審薺切」）使菡豕弑試時士氏市寺是而兒耳尓爾二貳刵

3．東三等・鍾、屋三等・燭の知・章組

【東】終用（＝鐘）衆充重

【容】中蟲舂

【篤】竹鬻亍（＝躅）叔赤孰

【浴】豕束蜀屬

おなじく通摂の来母

【東】龍櫳弄

【容】隆

4．二等江・肴・覚韻の牙喉音

【陽】夆巷

【岡】講項

【宵】交教孝爻肴

【豪】鮫

【薬】覺學

【各】珏角殼楽岳

文字に下線（波線）を付けたところは、『六書總要』の音注がほかのものと連繋せず、『諧聲指南』の「目録」にも収められていないので、発表者が判断したものである。また、左に＊を付した文字は、『諧聲指南』の「目録」では逆の韻に帰属せしめられている。

中古二等皆・佳・夬、山・刪・咸・銜、狎・洽韻牙喉音字は、独立させられて、三一皆、一五咸、一五狎韻を形成しているが、なかに三〇咍、一四寒に混入しているものがあり、山摂黠・鎋韻のそれは、咸摂狎・洽韻と分かれて一四曷韻に入っている。

また、中古臻・曽・梗摂一二等合口系の韻は、開口系が一韻（庚韻）であるのに対して、-ng系の萌・-n系の文の二韻がある（入声、末・勿韻）。中古山摂の桓韻の唇音・舌尖音声母を持つ字は文韻に合流しているが、このことについて、桐城人方以智の子方中履が著した『古今釋疑』は、呉元満の音韻において、

謾の音は門

満の音は猛

浸×〔漫〕の音は悶

であって、新安人の郷語がこのようであるのだと述べているが(注11)、謾（謾）・満・漫は中古桓韻明母の字であって、呉の文韻所属と考えられるのに対し、門・悶は魂韻明母、猛は庚韻明母だから、呉の庚ないし萌韻の所属と推測できるものである。したがって、方中履は、すくなくとも唇音について、呉の二韻の区別をないものとしているに等しい。この二つの合口については、さらに検討が必要である。

5　『六書總要』の音注について(3)

呉元満の三十一字母は三十六字母から、敷知徹澄娘の五母を引いたものに等しく、中古の知・莊・章三組は照穿牀審禪母に、敷母は非母に合流している。しかし、以下のような音注例からうかがえるように、著者にとって、中古の全濁声母、および、影母に対する云・以母と一部の疑母字は区別しがたいもののように見える。中古全濁上声は多く去声になっており、上声の韻には、次の二例を除き全濁字母の文字がない。

上：禪養切

下：匣馬切

このことは、『諧聲指南』巻頭の「諧聲指南凡例」にも述べられていることである。

「一　全清半濁字有上聲。全濁字無上聲。」

しかし、全濁音が清音あつかいになって上声に留まっている場合もあり、それも含め全濁音と全清音、全濁音と次清音、全清音と次清音の区別が曖昧な音注例が存在する。

並→幇　上軫：牝（音丙）

奉→非　去恵：狒（音費）　上古：阜（音府）　入篤：夏（音福）

敷→奉　去翰：氾（音飯）

定→端　入篤：毒（音篤）

端→定　去恵：敦（音隊）

群→見　去宥：咎（音究）　上語：虞・秬（音矩）　去震：詣（音敬）　上楯：囧・炅（音窘）

見→群　去御：昛・瞿（音具）　入浴：斥（音局）

従→精　上阮：雋（精阮切）

精→従　入各：鬷（音昨）

澄→照　上薺：豸（音咫）

匣→暁　上薺：匚（音喜）　去恵：恵（暁貴切）〔『指南』匣母〕　上罕：棗・弓（音罕）

暁→匣　去順：夐（匣順切）

並→滂　上小：殳（音縹）

透→定　入勿：去（音突）〔突：定勿切〕

群→溪　去祭：臮（音器）

従－清　去震：叡（音倩）

澄→穿　入質：奩・齂（音尺）

滂→幇　上果：叵（幇果切）

幇→滂　上果：尰（滂果切）

溪→見　平淳：頃（音均）〔『指南』溪母〕　入屑：刧（音結）

見→溪　上阮：く（音犬）　上銑：蹇（音遣）

定→透　上銑：殄（音忝）／上軫：壬（音挺）　去笑：糶・糶（音跳）

清→精　上罕：瞽（音纘）

さらに、中古破擦音の従母、崇・船母と摩擦音の邪母、禅母との間では、かなり文字の編成替えがおこっているが、一部でそれが審母と分かち難くなっている例がある。

船→審　去楯：盾（審準切）　去順：順（審俊切）

邪→従　去志：巳（従志切）兕（音巳）　去震：夷（音盡）

禅→床　平真：臣（音呈）

崇船→禅　平遮：它（禅遮切）　去蔗：射（禅蔗切）　去志：士（禅至切）　平先：孱（音蝉）　平真：乗・岑（音辰）〔辰：禅真切〕　入屑：舌（禅屑切）　入質：食・實（音石）

平真：晨（音神）・入術：朮（音述）：『指南』禅母

上声韻にはまた喩母の音節も欠けている。すなわち、他声では、喩母として、影母と対立している中古云・以母字が、上声においては中古影母字と一括して影母あつかいされているのである。

例　八真韻の場合：

平真　影真切：音因　音因：堊氤鷹賏殷衾／喩真切：寅　音寅：盈贏嬴仍垩尤

上軫　因軫切：引　音引：廴飮雪乚

去震　影正切：印　音印：壥／音孕：胤　音胤：併

しかし、他声においても影・云・以三母の間には所々混乱があり、疑母字の一部およびいくつかの暁・匣・日母字でこれに合わせられたものがある。さらにそれが、灰韻および寒韻において、微母あつかいにされたものが存在する。そのほか、娘母字で疑母とみなされているものがある。

云／以→影　去祭：裔（音意）　去恵：軎（音畏）　平魚：于（影魚切）雩（音於）　平元：鳶（音淵）　入浴：毓＝育（影浴切）昱賣（音育）　入薬：尸（音約）　入術：裔（影術切）

疑→影　上果：厄（影果切）〔『指南』疑母〕

疑→喩　去恵：巍（音胃）　平麻：牙（喩麻切）　平皆：厓（喩皆切）　平咸：顔（喩咸切）　去陷：雁（喩陷切）　入各：樂（喩各切）岳（音樂）

暁→影　入術：臭（音裔）

匣→影　上小：晶（音杳）　平光：生（音汪）

匣→喩　平淳：熒（音云）

日→喩　平真：仍（音寅）

以→微　平灰：敃・微（音維）　上賄：唯（音尾）

匣→微　平寒：丸（敃寒切）完（音丸）

娘→疑　上語：女（疑主切）　上銑：戺（音儼）　平文：𦣞（疑文切）　平桓：奴（疑桓切）　入浴：肭（音衄）　入屑：卒・聶（音業）聿（音臬）　入革：疒（音額）鬣（衄革切）

またer韻を産む止摂開口日母字が、来母とみなされていることも注目される。

平之：而（來之切）兒（音而）　上止：耳（來止切）尓・爾（音耳）　去志：二（來至切）貳・刵（音二）

そのほか、次の特殊例が一件見られる。

心→暁　平先：仙（音軒）〔軒：暁先切〕

6 おわりに

以上で、『六書總要』の音注についての初歩的考察の報告を終える。これは、1993年10月に行われた、日本中国語学会第43会大会において、「「六書總要」の諧声文字の分類について」という題目で口頭発表した内容の前半にほぼ等しい。会場で、出席のかたがたから懇切なご教示をたまわり、なかんずく、呉元満の出身地である、徽州（歙県）をはじめとする地方の明清・現代の方言との比較が必要であるとの指摘を受けたが、本稿においてはそれをはたすことができなかった。また、音注の特色の検討とあわせ、そのことを必要としたそもそもの目的である、呉元満の諧声文字の分類がどのような基準でなされているのかの検討・報告が必要である。この点については、口頭発表の際にも、『六書總要』のみを資料として見た場合に導き出される結果を報告したが、その後『諧聲指南』を見てゆくにしたがい、再検討を要するらしいことがわかってきたので、本稿には含めず、今後の課題とすることにした。

〈注〉

注１：「意有盡而聲無窮。故因聲以補意。立部爲母以定意。附他字爲子以調和其聲音。故曰諧聲。或諧聲叶聲以成字。或諧音叶音以成字。或轉聲轉音以成字。其正生者二種。一諧本聲。二諧叶聲。其變生者二種。一諧本音。二諧叶音。其兼生者四種。一諧轉聲。二轉叶聲。三諧轉音。四轉叶音。分八類而諧聲備。……。」（『六書總要』「諧聲論」）

「六書形事意聲四者為體。假借轉注二者為用。四體之中。惟諧聲居多而最難辯者。何則。音有清濁。韻有古今。又有轉聲轉音及旁紐正紐之別。此指南所由而作也。……。今泝源倣六書統定為四種。曰諧本聲、諧叶聲、諧本音、諧叶音。指南新増四種。曰諧轉聲、轉叶聲、諧轉音、轉叶音。而八種之内。各分平上去入四聲。計三十二類。……。」（「諧聲指南引」）

注２：趙宧光『説文長箋』の「諧聲通韻表」の条・同「凡例」の「字書得失例」第二十六条。何九盈『中国古代語言学史』第十八節（1985、河南人民出版社）。

注３：「満不揣愚陋。會合三家為一。裒集諸説所長。述六書泝源十六巻。取象形二百七十文。指事二百五十六文。會意八百八十四字。諧聲七千一百七十字。闕疑五十三字。缺義八十字。共八千七百二十字。……。艸稿雖成。尚未謄録。以注疏浩瀚。無力鋟版。乃刪去諧聲字六千八百五十。別集諧聲指南一巻。摘取象形指事會意。及諧聲復

可為聲母者。并闕疑一千八百三十字。字數不多而要領具在。因名曰六書總要。……。」(「六書總要自序」)

注4：「毎字之下、先音切以辯其聲。次訓詁以通其義。次引證以明其用。次説六義以原造字本旨。次籀篆隷楷訛俗以叙其變。次假借論一字數用。次轉注辯一字數聲。」(「六書總要凡例」)

注5：象形・指事・会意・諧声はさらに数種類に細分されている。先に挙げた「諧本声」・「諧叶声」等の八種の別も、この小見出しによっていずれであるかがわかる。

注6：『言語研究』九号、昭和一六年

注7：永島氏論文中では「切韻樞細」になっているが、同一物かと思われる。

注8：例として冒頭部分数行を引けば、次のようである。(〈〉内の文字は、原文では白抜きで刷られているものを、引用にあたり、便宜上〈〉にいれて示したものである。)

「諧聲指南目録

平聲

第一東〈見〉工公〈端〉東冬〈精〉宗㝵〈照〉終〈影〉翁〈非〉風圭封半夆豐〈溪〉空〈清〉悤〈穿〉充〈泥〉農〈明〉冢蒙曹夢〈來〉龍〈定〉同童〈奉〉逢

第二容〈見〉弓宮躬〈照〉中〈影〉邕雝〈審〉舂〈曉〉凶匈兄〈來〉隆〈日〉戎〈喩〉容庸〈群〉窮〈從〉从從〈牀〉蟲

第三陽〈見〉……」

注9：「聲音以易識字爲反切。難識直音某。……」(「六書總要凡例」)

注10：第二以下の音注には、「古韻」と同じでないものを表示したという(『六書總要』凡例)「方音」・「今音」(「今読」)の注、「転注」即ち意味の派生による一字数音数義、ないし叶韻に関わると考えられる「転」音注、「古音」・「旧」音の注などがある。これらの音の考察は今後の課題としたい。

注11：「……。近世呉元満音韻。凡諵皆言門。満音猛。浸音悶。則新安人之鄉語。猶此聲也。」(『古今釋疑』巻十七「真庚能備各母異状」)文中の「浸」は「漫」の誤りと思われる。

〈参考文献〉

永島榮一郎「近世支那語特に北方語系統に於ける音韻史研究資料について(續)」　『言

語研究』九号　1941
殷孟倫「〈説文解字〉形声条例述補」　『子雲郷人類稿』（1985　斉魯書社）PP.153-196
何九盈『中国古代語言学史』　1985　河南人民出版社
李開『漢語語言研究史』　1993　江蘇教育出版社
富平美波「明末の文字学者呉元満の著作と周辺の人々－［万暦］『歙志』の呉元満伝から」『山口大学文学会志』42 1992